

令和 3(2021)年 7 月 20 日
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京**2021 年度の「思考と技術と対話の学校」がスタート。
共創・災害復興・手話などをテーマにした学びのプログラムの参加者募集中！**

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の実施する「Tokyo Art Research Lab(TARL)」では、2021 年度の「思考と技術と対話の学校」のプログラムを 7 月より開始し、3 つのプログラムで参加者を募集します。

「思考と技術と対話の学校」は、“アートプロジェクトをつくる”をテーマに、「スタディ」、「ディスカッション」、「レクチャー」の 3 つのプログラムを実施することで、アートプロジェクトの可能性を広げていくことを目指しています。

今年度は、異なる身体感覚の人々との共創や、災害復興の現場から未来を考える対話シリーズ、アートプロジェクトの担い手を対象とした手話講座などを展開します。多様な領域の実践者や先駆者とともに学びあいながら、これからの時代に求められるアートプロジェクトとは何かを思考し、かたちにすることができる人材の育成を目指します。

↓↓↓ 次項より、参加者募集中のプログラムをご紹介します！ ↓↓↓

現在募集中のプログラム①

アートプロジェクトをつくるための実践「東京プロジェクトスタディ」



スタディ 1 | わたしの、あなたの、関わりをほぐす ～ 共在・共創する新たな身体と思考を拓く～

異なる身体感覚を持つ人々とのコミュニケーションを拡張する新たな手法を考える

東京プロジェクトスタディは、“東京で何かを「つくる」としたら”という投げかけのもと、「ナビゲーター」と、公募で集まった「メンバー」がチームとなり、リサーチや実験を繰り返しながら新たなプロジェクトの核をつくる試みです。さまざまな専門性を持つナビゲーターと、それぞれの問題意識や興味から、スタディ(勉強、調査、研究、試作)を展開します。

2021年8月から始まる「スタディ 1 | わたしの、あなたの、関わりをほぐす～共在・共創する新たな身体と思考を拓く～」では、インタープリターの和田夏実と、デザイナーやアーティストとして活躍する岡村成美という、第一言語を手話とする二人のナビゲーターを迎えます。

身体性や感覚が異なる者同士が意思を伝えあおうとして生まれた視覚身体言語(手話)、感覚をつなぐ伝達方法としての触手話、点字や手書き文字、音声ガイドなどの多様なコミュニケーションを起点に、一人ひとりの身体と記憶、ことばと感覚にまつわるディスカッションやワークショップ、リサーチを重ねます。その経験を通して、異なる感覚を持つ他者とのコミュニケーションを促進・拡張させる新たなメディアや手法を発明することに取り組みます。

【実施概要】

実施期間:2021年8月～2022年3月 ※全13回程度の活動日を予定

会場:ROOM302(3331 Arts Chiyoda 3F[東京都千代田区外神田 6-11-14-302])ほか、オンラインで実施予定

定員:10名程度

参加費:一般24,000円 学生16,000円/約8ヶ月 ※フィールドワーク等の交通費、飲食費は別途実費

申込締切:7月30日(金)18:00

対象:もう者やろう者など、異なる身体感覚を持つ人々とのアートプロジェクトを企画運営したい、コーディネートしたい方

※年齢・資格などは不問 ※希望に応じて、手話通訳や文字情報支援などの情報保障があります

詳細 URL:https://tarl.jp/school/2021/tps2021_1/

ナビゲーター

和田夏実 | インタープリター



1993年生まれ。ろう者の両親のもとで手話を第一言語として育ち、大学進学時にあらためて手で表現することの可能性に惹かれる。視覚身体言語の研究、様々な身体性の方々との協働から感覚がもつメディアの可能性について模索している。近年は、LOUD AIRと共同で感覚を探るカードゲーム“Qualia”(2018)やたばたはやと+magnetとして触手話をもとにした繋がるコミュニケーションゲーム“LINKAGE”、“たっちまっち”(2019)など、ことばと感覚の翻訳方法を探るゲームやプロジェクトを展開。アーティスト南雲麻衣とプログラマー児玉英之とともに Signedとして視覚身体言語を研究・表現する実験、美術館でワークショップなどを行う。2016年手話通訳士資格取得。2017-2018年 ICC インターコミュニケーションセンター emergencies!033 “tacit creole / 結んでひらいて”。

岡村成美 | Designer/Director/Costume Designer/Artist



1992年生まれ。杉野服飾大学卒業。2018年、LOUD AIR(ラウドエア)設立。手話を第一言語とし、ファッション、オブジェ、感覚などを制作。様々なジャンルを通して社会実験している。ブランド運営、衣装制作(アーティスト/広告/劇団/イベント等)、マガジン販売、感覚ゲーム Qualia、手話講演等。

近年は、BIRKENSTOCK original notebook.出会うに、ふれる。に出演、21_21 DESIGN SIGHT『トランスレーションズ展—「わかりあえなさ」をわかりあおう』Visual Creole での Image direction を担当、森ビルのオウンドメディア「HILLS LIFE」連載“感覚の遊び場”Image Direction を担当している。

現在募集中のプログラム②

新たなプロジェクトのヒントを探る「ディスカッション」



災間の社会を生きる術(すべ/アート)を探る(全6回) —災害復興へのいくつかの「かかわり」から—

災禍の現場に立つには、いったい、どんな態度や技術、方法がありうるのか？ ナビゲーターとの議論を通して、「災間の社会を生きる術」について考える

地球規模の気候変動の影響から、近年では国内各地で大小さまざまな災害が頻発しています。それぞれの地域の歴史を紐解けば、何らかの災禍の経験があることでしょう。そして、2020年初頭から日本国内でも新型コロナウイルスの感染拡大がはじまり、現在は世界的な災禍の渦中にあります。

災間の社会——すなわち、異なる災禍の「間」に生きるいま、誰もが災禍の当事者になりうるといえます。それと同様に誰もが何らかのかたちで支援者となりうることもあるでしょう。そのとき、わたしたちには、どのような「かかわり」がありうるのでしょうか？

このディスカッションシリーズでは、3人のナビゲーターとともにゲストに話を伺っていきます。震災体験者の手記を扱う「阪神大震災を記録しつづける会」など、災害の記録実践を行なってきた高森順子、中越地震やその他の災害復興の現場に実践と研究の両面でかかわってきた宮本匠、「東京都による芸術文化による被災地支援事業(Art Support Tohoku-Tokyo)」を担当してきたアートカウンシル東京の佐藤李青を加えた、災害復興の現場にかかわりをもつナビゲーター陣が「災間の社会を生きる術」について考えます。

【実施概要】

日程(全6回):

2021年7月31日(土)、8月21日(土)、9月25日(土)、10月9日(土)、10月30日(土)、12月4日(土)

時間:14:00~17:00(各回3時間)

受講形式:オンライン

定員:30名(先着順)

参加費:6,000円(全回通し・資料代・郵送代込)

申込締切:2021年7月28日(水)17:00

対象:災害という視点から文化事業のかかわりを考えたい方、災害復興の現場に関心がある方

詳細 URL:<https://tarl.jp/school/2021/diss01/>

ナビゲーター

宮本匠 | 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科准教授



1984年大阪府東大阪市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。2004年新潟県中越地震の被災地でのアクションリサーチをはじめとして、内発的な災害復興はいかに可能かという問いをもちながら、東日本大震災や熊本地震などの被災地で支援活動を通じた研究を行っている。共編著に、『現場でつくる減災学』(新曜社、2016年)、近著に『人口減少社会の災害復興の課題:集会的否認と両論併記』(『災害と共生』、2019年)がある。特定非営利活動法人CODE 海外災害援助市民センター副代表理事。

高森順子 | 愛知淑徳大学助教/阪神大震災を記録しつづける会事務局長



1984年兵庫県神戸市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。1995年阪神・淡路大震災の経験を表現する人々とともにアクションリサーチを行い、被災体験の分有のあり方について研究している。2014年に井植文化賞(報道出版部門)受賞。近著に『声なき被災者の経験を未災者に伝える』(岡部美香・青山太郎との共著『シリーズ人間科学6 越える・超える』、大阪大学出版会、2021年)がある。Photo by Yuki Shimizu

佐藤李青 | アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー



1982年宮城県塩釜市生まれ。国際基督教大学卒業。東京大学大学院人文社会系研究科(文化資源学)修士課程修了、同博士課程満期退学。企業メセナ協議会インターン、文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員会事務局、小金井市芸術文化振興計画策定の小金井市と東京大学の共同研究グループなどを経験。小金井アートフル・アクション！実行委員会事務局長として運営組織と活動拠点(小金井アートスポット シャトー2F)の立ち上げを経て、2011年6月より現職。東京アートポイント計画、Tokyo Art Research Labに加え、Art Support Tohoku-Tokyo(東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)を立ち上げから事業終了まで担当(2011-2020)。ジャーナル『東北の風景をきく FIELD RECORDING』編集長(2017-2020)。

ゲスト

吉椿雅道 | CODE 海外災害援助市民センター事務局長



1968年福岡県生まれ。十代より武道(中国武術、合気道)や東洋医学(気功、野口整体など)を学ぶ傍ら、アジア、南米の先住民・少数民族支援のNGO活動にかかわる。'92年ブラジル地球環境サミットで開催された世界先住民会議を機にNGO「先住民の杜基金」の事務局をつとめる。'95年阪神淡路大震災で足湯ボランティアを始める。'99年より'02年までアジア約20か国を歴訪し、各地の伝統医療、少数民族の伝統文化やNGOの現場(タイの北タイ農民ネットワークやさくらプロジェクト、カンボジアのアキラー地雷博物館、ベトナム子どもの家、インドのマザーハウス、中国雲南省の麗江民族孤児育幼院など)を歩く。'04年より被災地NGO協働センター、震災がつなぐ全国ネットワーク、CODE海外災害援助市民センターのスタッフとして中越、能登、インドネシア、パキスタン、中国、ハイチ、フィリピン、ネパールなどの被災地で支援活動に従事。'06年より1年間、日本各地の防災・減災の智恵を拾い集め、「いのちをまもる智恵」を出版。'08年5月より約4年間、四川大地震の現場で活動。'11年3月11日、東日本大震災の被災地に入り、足湯などの活動を行う。'11年、CODE事務局次長を経て、'13年、CODE事務局長に就任。'16年3月、NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀～」に出演。2019年第4回貝原俊民「美しい兵庫づくり賞」を受賞。現在、関西NGO協議会常任理事、Kansai-SDGs市民アジェンダ分科会座長、中国四川省新安世紀教育安全科技研究院顧問、コロナ支援の国際アライアンスIACCR呼びかけ人を務める。

瀬尾夏美 | アーティスト



1988年東京都生まれ、宮城県在住。アーティスト。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。土地の人のことばと風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2012年より、映像作家の小森はるかとともに岩手県陸前高田市に拠点を移す。地元写真館に勤務しながら、同市を拠点に制作。2015年、仙台市で東北の記録・ドキュメンテーションを考えるための一般社団法人NOOKを立ち上げる。現在は“語れなさ”をテーマに各地を旅し、物語を書いている。ダンサーや映像作家との共同制作や、記録や福祉に関わる公共施設やNPOなどとの協働による展覧会やワークショップの企画も行う。参加した主な展覧会に「ヨコハマトリエンナーレ2017」、「第12回恵比寿映像祭」など。最新の映画作品に「二重のまち／交代地のうたを編む」(小森はるか＋瀬尾夏美)。著書に、『あわいゆくころ——陸前高田、震災後を生きる』(晶文社、2019年)、『二重のまち／交代地のうた』(書肆侃侃房、2021年)。 Photo by Yuto Chiba

山住勝利 | NPO 法人ふたば／ふたば学舎 震災学習ラボ室長



1967年神戸市生まれ、同地在住。大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。博士(言語文化学)。2013年より神戸市立ふたば学舎の震災学習事業に携わっている。阪神・淡路大震災の記憶と教訓を伝える体験型の震災学習では、毎年、全国の小学校から高校まで15校前後の受け入れをおこなっている。これまでの参加者数は約18,000人。制作物として、震災学習冊子(2013年)、阪神・淡路大震災に関するCD「被災の語り歌」(2014年)、防災ソングCD「ぼうさい☆ジャンケンボン！」(2015年)、震災体験学習手引き(2021年)などがある。

坂本顕子 | 熊本市現代美術館 学芸員



1976年熊本市生まれ。同館設立準備室を経て現職。教育普及をベースに現代美術系の企画展やプロジェクトを多数行う。近年の主な展覧会に、「大竹伸朗 ビル景」展(2019年)、「ライブ 生きることは、表現すること」展(2020年)、震災や災害に関わる企画として、2017年度グッドデザイン賞を受賞した「〇〇(マルオ)の食卓」展(2016年)、「3.11→4.14-16 アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本」展(2017年)、「令和2年7月豪雨 REBORN プロジェクト」(2020年)を手がける。また、熊本地震記録集『地震のあとで—美術館を、美術館としてあける』(2018年)の編集も行った。

開催予告:7月末より募集予定
現場に必要な新たな視点・技術を獲得する「レクチャー」



手話と出会う ～アートプロジェクトの担い手のための手話講座～ 基礎編(映像プログラム)

手話講座動画の無料配信と、講師との交流プログラムで、 アートプロジェクトのアクセシビリティへの視点を育む

日々の営みのなかで、まち・人・活動をつなぐアートプロジェクト。異なる背景をもつ人々が集い、語り合い、共に活動をするその現場では、様々なコミュニケーションが日々交わされています。プロジェクトの場や時間をより豊かなものとしているのは、人々との多様なコミュニケーションと言っても過言ではありません。

本講座は、視覚身体言語「手話」の基礎を学び、体感するのみならず、ろう文化やろう者とのコミュニケーションについて考えていく映像プログラムです。手話の基本表現から、「チケット窓口、受付、プロジェクトの説明」で使える表現まで、プロジェクトの現場での実践を意識した内容をお届けします。公開された収録映像は、いつ、どこからでも視聴いただくことができます。また、受講者と講師が交流するオンライン企画も実施します。

【実施概要】

対象:手話や身体言語を学び、アートプロジェクトの運営に役立てたい方
詳細 URL:<https://tarl.jp/school/2021/lecture-signlanguage-basic/>

■映像配信

実施期間:2021年7月末～ ※全16本配信予定

会場:TARL公式YouTubeチャンネル(<https://www.youtube.com/channel/UC7Bg6o4OewAgLRiKhqLi3Ew>)にて順次公開予定

参加費:無料(通信料はご負担ください)

【関連企画】ミートアッププログラム

本講座(映像プログラム)を視聴いただいた方を対象にミートアッププログラムを開催予定です。「自分のことを伝えてみる」「CL表現を学ぶ」など、映像の内容を復習しながら、講師や参加者とオンラインで対面し手話を実践します。

日時:2021年8月11日(水)、9月1日(水)、9月15日(水)、9月29日(水) いずれも20:00～21:30

実施方法:オンライン

定員:各回10名(先着順)

申込:2021年7月28日(水)より募集開始予定

▼参加に係る費用と申込〆切

	全回通し	8月11日(水)	9月1日(水)	9月15日(水)	9月29日(水)
参加費	4,000円	各回:1,000円			
申込〆切	8月6日(金) 17:00 ※入金期限: 8月10日(火) 15:00	8月6日(金)17:00 ※入金期限: 8月10日(火)15:00	8月27日(金)17:00 ※入金期限: 8月31日(火)15:00	9月10日(金)17:00 ※入金期限: 9月14日(火)15:00	9月24日(金)17:00 ※入金期限: 9月28日(火)15:00

講師

河合祐三子 | 俳優／手話・身体表現ワークショップ講師



北海道札幌市出身

俳優(フリーランス)、NHK E テレ「手話ニュース」「子ども手話ウィークリー」キャスター、手話・身体表現 WS 講師、子ども演劇 WS 講師、TA-net 舞台手話通訳養成講座(2018-2019 年)の指導を行う。2018 年よりサインポエト(手話)と声の朗読、ダンスなどゆるやかに繋がりが合うユニット『でんちゅう組』のメンバーになり活動中。

手話通訳

瀬戸口裕子 | 手話通訳士



耳の聞こえない方々の生活に関わる手話通訳を担う傍ら、個人的な活動として耳の聞こえない方と一緒に巡る美術館の作品鑑賞を8年間続けてきた。その後、東京都美術館のとびらプロジェクト「とびラー」になり、ワークショップ「ポットィチエリ・鑑賞・香り〜聞こえない方と聞こえる方のサイレントコミュニケーション」や、「アート筆談 de コミュニケーション」などのとびラボを実施した。その経験を活かし「TURN プロジェクト」や東京都写真美術館などアートの現場での手話通訳を担うようになる。また、NPO 法人シアター・アクセシビリティネットワークの会員としてイギリスの演劇における舞台手話通訳の視察研修に参加し、演劇関係のアクセシビリティについても研究中。河合祐三子(俳優／手話・身体表現ワークショップ講師)

その他、各プログラムの詳細等は、Tokyo Art Research Lab 公式ウェブサイト(<https://tarl.jp/>)をご覧ください。

※内容は変更となる場合がございます。最新情報は上記ウェブサイトでご確認ください。

Tokyo Art Research Lab とは？

Tokyo Art Research Lab(TARL)は、アートプロジェクトを担う全ての人々に開かれ、共に作りあげる学びのプログラムです。人材の育成、現場の課題に応じたスキルの開発、資料の提供やアーカイブなどを通じ、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

アートプロジェクトの担い手のためのスクールプログラム「思考と技術と対話の学校」、新たなスキル／システムを追求する「研究・開発」の二軸で事業を展開しています。

2021年度の「思考と技術と対話の学校」は、実践的な学びの場「スタディ」、アートプロジェクトの可能性を広げる「レクチャー」、新たなプロジェクトのヒントを探る「ディスカッション」の3つのプログラムを展開します。これからの時代に求められるアートプロジェクトとは何かを思考し、かたちにすることができる人材の育成を目指します。

*本事業は、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材育成事業として実施しています。また、「東京アートポイント計画」と連携し、相互にフィードバックをしながら展開します。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

<https://tarl.jp/>

アーツカウンシル東京とは？

世界的な芸術文化都市東京として、芸術文化の創造・発信を推進し、東京の魅力を高める多様な事業を展開しています。新たな芸術文化創造の基盤整備をはじめ、東京の独自性・多様性を追求したプログラムの展開、多様な芸術文化活動を支える人材の育成や国際的な芸術文化交流の推進等に取り組めます。また、オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組を「Tokyo Tokyo FESTIVAL」として展開しています。 <https://www.artscouncil-tokyo.jp>

お問い合わせ

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
事業推進室 事業調整課 事業調整係 TARL 事務局（担当：坂本、浜田）
TEL：03-6256-8435(平日 10:00～18:00)
E-mail：tarl@artscouncil-tokyo.jp